

(対象事業：地域連携強化事業 <地域文化資源整備活用事業>・ミュージアム支援地域人材育成事業  
・国際交流拠点形成事業)

事業名：みんなで学ぼう名護・やんばる講座  
事業者名：みんなで学ぼう名護・やんばる講座実行委員会  
住 所：沖縄県名護市東江1-8-11（名護博物館内）  
TEL：0980-53-1342  
FAX：0980-53-1362  
HPアドレス：<http://www.city.nago.okinawa.jp/4/3282.html>  
連携事業者名：名護博物館友の会・宜野座村立博物館、東村立山と水の生活博物館、奥ヤンバルの里民具資料館、今帰仁歴史文化センター  
会 場：名護博物館、宜野座村立博物館、東村立山と水の生活博物館、奥ヤンバルの里民具資料館、今帰仁歴史文化センター  
事業期間：平成21年7月4日～平成22年2月28日



## 1. 館の使命と本事業の関係

地域の人々との共同作業をととして、積極的に親しみやすい博物館の姿勢を示すことは、1984年の開館時から、「みんなでつくる」ことを柱の一つにしてきた名護博物館の活動そのものであり、市制40周年記念事業として新館建設がすすめられる名護博物館にとっても、「市民学芸員」や「地域ガイド」の人材養成と活動の拡充を実現するためのステップとなるものである。

また、グリーンツーリズムや集落巡りなどのような「文化観光」との連携や、地域ブランド開発などへの情報提供といった具体的な取り組みも、地域の博物館が地元で果たすべき実践的な活動のひとつだと考える。

さらに、本事業をととして市町村の行政の枠を越えた博物館連携が促進されるならば、沖縄島北部だけでなく、沖縄県内の他館との連携に発展させる可能性も生まれることになり、県内の南北格差を軽減することにもつながると期待される。

## 2. 企画内容

### ①事業目的

過疎化と不況の影響が深刻な、1市11町村からなる山原（沖縄島北部）の生き残りとして、市制40周年記念事業として新たに建設計画がすすめられる名護市立博物館（仮称）の活動をより充実させるため、地域の中心都市である名護市から自分たちの足もとを見つめ直す運動を広げ、各地の博物館・資料館と連携しながらさまざまな「在来文化資源」の価値を再評価し、教育・商品開発・観光などに結び付く新たな展開をはかる。

### ②事業概要

名護市を政治・経済の中心とする沖縄島北部（山原）では、伝統的な暮らしや文化が、それぞれの地域に今も色濃く残っている。那覇に代表される中南部の文化圏と大きく異なる、これら北部文化圏のありようを、名護博物館と各地の博物館とをむすびながら、多くの市民・児童と再発見し、記録した情報を展示・保存することでその価値を地域の次世代に継承する。

地域に残るこの「在来文化資源」とそこに付随する情報は、さまざまな利活用を可能にするタネとなるだけに、いつでも誰でも利用できる形に蓄積・整備し、市民参加型の運動として継続的に拡充できるようなモデル事業として、本事業を位置づける。

### 3. 事業実績

#### (1) 事業の主な内容及び日程

「みんなで学ぼう名護・やんばる講座」とは、地域の博物館の協力のもと、名護市・宜野座村・東村・国頭村・今帰仁村を歩き、身近な自然や歴史・文化をみんなで学ぶものです。

5回にわたる地域をめぐるワークショップの記録は、毎回、展示会を開催し、学習資料とあわせて地域で公開されます。当日参加できなかった人も、展示会場でそれぞれの地元について学び、情報交換をすることができます。

実施時期	計画事項						摘 要
	①検討委員会	②実行委員会	②ワークショップ	③展示会	④制作物	⑤報告書	
7/30	第1回打合						検討委員3人
8/2～8/5		第1回打合・予備調査					企画部会3人、調査員2人
8/8～8/11		第1回調査					企画部会3人、調査員2人
8/15			第1回調査・記録				作業部会3人、企画部会2人
8/18～8/20		データ整理					6人
9/10～9/17				名護博物館			受付監視2人
9/1～9/4		第2回打合・予備調査					企画部会3人、調査員2人
9/7～10		第2回調査					企画部会3人、調査員2人
9/12			第2回調査・記録				作業部会3人、企画部会2人
9/21～9/23		データ整理					6人
10/21～10/25				宜野座博物館			受付監視2人
10/17～20		第3回打合・予備調査					企画部会3人、調査員2人
10/26～29		第3回調査					企画部会3人、調査員2人
11/1			第3回調査・記録				作業部会3人、企画部会2人
11/11～13		データ整理					6人
11/25～29				東村立山と水の生活博物館			受付監視2人
11/14～17		第4回打合・予備調査					企画部会3人、調査員2人
11/22～24		第4回調査					企画部会3人、調査員2人
11/29			第4回調査・記録				作業部会3人、企画部会2人
12/1～3		データ整理					6人
12/9～13				奥ヤンバルの里民具資料館			受付監視2人
11月上旬							検討委員2人
12/10～13		第5回打合・予備調査					企画部会3人、調査員2人
12/15～18		第5回調査					企画部会3人、調査員2人
12/20			第5回調査・記録				作業部会3人、企画部会2人
12/21～23		データ整理					6人
1/20～1/26				今帰仁村歴史文化センター			
2/1～2/28					地域情報誌製作(印刷)		企画部会2人、作業部会2人
2/1～2/28					地域情報CD-ROM製作		企画部会2人、作業部会2人
2/1～2/28						報告書	企画部会2人、作業部会2人
2/1～2/28					紙芝居製作		企画部会2人、作業部会2人

## (2) 参加者の数

参加者人数 延べ 1,120人

内 訳:

(開催地別／ワークショップ)

名護博物館	約 30 名	宜野座村立博物館	約 30 名
東村立山と水の生活博物館	約 30 名	奥ヤンバルの里民具資料館	約 30 名
今帰仁歴史文化センター	約 30 名		

(開催地別／企画展)

名護博物館	約 250 名	宜野座村立博物館	約 175 名
東村立山と水の生活博物館	約 180 名	奥ヤンバルの里民具資料館	約 200 名
今帰仁歴史文化センター	約 165 名		

(世代別)

幼児	約 70 名	小・中学生	約 100 名
高・大学生	約 200 名	一般・高齢者	約 750 名

## (3) 事業により作成した印刷物等

1. みんなで学ぼう・名護やんばる講座ポスター (5 地域合同) /2,000 枚
2. みんなで学ぼう・名護やんばる講座チラシ (5 地域) /5,000 枚×5 地域
3. みんなで学ぼう・名護やんばる講座パンフ (5 地域) /1,000 枚×5 地域
4. 名護・やんばる地域ガイド (元気の素を見つけよう) /A5 版: 208 頁 250 部
5. みんなで学ぼう・名護やんばる講座報告書/A4 版: 44 頁 250 部
6. CD-ROM. 名護・やんばるを学ぶ/250 枚
7. 紙芝居 (各 1 セット)

- (1) 人のため我がため (2) やがじじまのマース (3) がじゅまる願太とがじゅまるオジー  
(4) おばあちえ (5) 太陽の子キジムナー

## (4) 実施事業に関する新聞記事等

### ○新聞記事



沖縄タイムス 平成21年9月16日(水) 朝刊 文化面





琉球新報 平成21年10月25日(日) 朝刊 文化面

## ○テレビ、関連誌等

なし

## 4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

沖縄島北部地域に存在する9カ所ほどの公的博物館・資料館は、ひとつの文化圏を形成する地域でありながら、複数館が連携して市民とともに活動するような事業はこれまでほとんど実施されたことがなかった。財政的に厳しい状況が続く各地の博物館にとって、地域間交流の促進にも役立った今回のプロジェクトはその点でたいへん有意義なものであった。

資料・情報の共有や共同研究、展示会の共同開催、人材交流などなど、机上の話題に終始していた問題に対し、「やってみる」ことで一つの可能性を提示し、さまざまな情報収集やノウハウが蓄積できたことは、今後続く道筋となったばかりでなく、関係者一人ひとりに「やればできる」という気持ちを植え付ける効果があったといえる。

地域めぐりワークショップにおいては、設定した5カ所それぞれに特徴的で、ガイドの個性も加わって魅力的なものとなり、参加者にもたいへん好評であった。文献やwebなどにも公開されていない、地元ならではの情報があちこちにあらわれている状況に、あらためて地域の豊かさを実感したという参加者の声も数多く聞かれた。

一般の参加者にとっては、隣接しながらもこれまであまり知ることがなかった他地域の歴史・文化を学ぶことで「やんばる」全域に対する興味や愛着が芽生えたことは大きな収穫だったと思われる。沖縄島北部（やんばる）に生きる自らのアイデンティティや誇りといったものを確認する機会にもなり、それらを次代に継承する必要性も認識・共有することができたと考えられる。また、現地で行った展示報告会で、パネル写真のなかに子ども時代の自分たちの姿を発見し、住民の方々が集まって思い出を語りあっていたのは印象深い光景であった。

課題としては、若年者や児童生徒の参加が少なかった点があげられる。彼らへの積極的な働き掛けが今後は不可欠であろう。博物館と学校の連携強化や若年者へのアプローチの必要性などはこれまでもしばしば話題になってきたが、それを実証する結果となってしまった。従来の広報のあり方を見直し、IT技術の導入やメディアの積極的な活用なども検討すべき課題であり、速やかな実施が求められる。また、地域めぐりと連携して実施した展示報告会も、地域住民との触れ合いという点では課題が残る結果であった。遠隔地の博物館・資料館における開催は、距離や車の確保が問題であり、高齢者が気軽に行くには難しかったと思われる。

今後の展開としては、十分な事前調査に加えて、住民との情報交換を今よりさらに密にする必要性が求められる。地域にはそれぞれ地元のリーダー、「物知り」といわれている方々が必ずといっていいほど存在するだけに、それらのキーマンとの密接な信頼関係を日ごろから構築しておき、必要に応じてコーディネーターを引き受けていただくような関係が理想であり、それが地域に開かれた博物館のあるべき姿だと考える。